

花巻市 博物館

目次／ P1 花巻人形展
P2-3 平成 29 年度事業案内、体験学習メニュー
P4-5 没後 50 年 多田等観展
P6 活動レポート(平成 28 年度の博学連携について)
P7 コラム・info / P8 花博コレクション



だより

2017. 4 No. 51



花巻人形展

～花鳥風月～

5月7日(日)まで開催中！

花巻人形（上から時計回り）：内裏雛、太鼓と童子、武将、犬乗り童子、雄鶏、雌鶏、猫、武将

ただいま当館では、5月7日(日)までテーマ展「花巻人形展～花鳥風月～」を開催しております。花巻人形は江戸時代後期から 200 年以上に渡り制作されてきた土人形です。人形の種類が豊富で、内裏雛のほかに信仰・縁起物、歴史上の人物、動物など様々あります。彩色には赤色が多用され、そこに梅や桜などの花模様が描かれており、とても華やかです。

展覧会では、当館所蔵の約 3,250 点の花巻人形の中から、近年の新収蔵資料を中心に時代の風習や情景を多彩にかたどった素朴で愛らしい花巻人形の世界を「花鳥風月」のテーマになぞらえてご紹介しております。ぜひ、博物館へお越しください。

平成29年度 展示会・講座のご案内

◆展示会

○テーマ展「花巻人形展～花鳥風月～」

会期：開催中～5月7日(日)

近年の新収蔵資料を中心に、時代の風習や情景を多彩にかたどった素朴で愛らしい花巻人形の世界を「花鳥風月」のテーマになぞらえて紹介します。

○企画展「没後50年 多田等観

一チベットに捧げた人生と西域への夢～

会期：7月1日(土)～8月20日(日)

没後50年を迎えるチベット学の世界的権威。チベットに捧げた生涯と、花巻との交流、関連する西アジアの貴重な仏像などを紹介します。

☆記念講演会

「大陸から花巻へ」～多田等観をめぐる人々

講師：高本康子氏

(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員)

日時：7月22日(土) 13:30～15:00

場所：花巻市博物館 講座体験室

その他関連イベントを予定

○テーマ展 花巻城展

会期：9月16日(土)～11月12日(日)

近世以降、南部氏のもと花巻・北上地方の発展の礎となった花巻城、成り立ちにかかわる人やものに関連資料でたどります。

☆展示解説会、講演会など関連イベントを予定



復元された花巻城西御門

○共同企画展 ぐるっと花巻・再発見！ 「染織家 及川全三」

会期：12月9日(土)～翌1月28日(日)

思想家・柳宗悦が提唱した民藝運動に感銘し、出身地である東和町で作られていた羊毛織の「ホームスパン」に植物染の技術を導入、ホームスパンの工芸品としての地位を確立させた及川全三を所蔵資料とともに紹介します。

☆展示解説会等を予定



全三が愛用したホームスパン上着

○テーマ展「花巻人形展」

会期2月17日(土)～5月6日(日)

館が誇る500種類3000点以上にも及ぶ花巻人形のコレクションから、庶民の生活や文化、物語を色鮮やかに造形化した人形の奥深い魅力に迫ります。

◆講座

○館長講座

第1回 8月5日(土) 多田等観と宮沢賢治

第2回 10月7日(土) 花巻城

第3回 2月17日(土) 花巻人形の魅力
各 午後1時30分から午後3時

○古文書講座

第1回 10月15日(日)

第2回 11月12日(日)

第3回 12月3日(日)
各日 初級 午前10時から
中級 午後1時30分から

※展示・講座とも内容に変更がある場合があります。あらかじめご了承ください。

花巻市博物館の体験学習メニュー

博物館では、花巻の歴史や文化を楽しく学ぶ機会として、いろいろな体験学習を行っています。

今年度は、新たに戦国時代の体験学習として「鎧を着てみよう！」を追加しました。

ぜひ、皆さんご参加ください。

○こけし絵付け体験

日時：平成29年7月9日(日)

午後1時半から

内容等：煤孫盛造さん(煤孫こけし)を講師に迎え、工房見学の後、「こけし」の絵付け体験をします。

参加費：1,500円から 定員：20名

○勾玉づくり

日時：平成29年5月3日(祝・水)

9月17日(日)

午後1時半から

内容等：滑石を削って、磨いて、古代のアクセサリ「勾玉」を作る体験です。

参加費：330円 定員：20名

○壁かけ傘づくり体験

日時：平成29年7月16日(日)

午後1時半から

内容等：滝田信夫さん(滝田工芸)を講師に迎え、工房見学の後、壁掛け傘づくりを体験します。

参加費：1,500円 定員：20名

○琥珀玉づくり

日時：平成29年5月4日(祝・木)

9月18日(祝・月)

午後1時半から

内容等：琥珀を削って、磨いて、古代のアクセサリ「琥珀玉」を作る体験です。

参加費：730円から 定員：20名

○花巻人形絵付け体験

日時：平成29年8月6日(日)

平成30年3月25日(日)

午後1時半から

内容等：平賀恵美子さん(平賀工芸社)を講師に迎え、花巻人形の絵付けを体験します。

参加費：1,500円から 定員：20名

○縄文弓矢・火起こし体験

日時：平成29年5月5日(祝・金)

午後1時半から

内容等：弓矢を使う体験と、木を使って火起こしに挑戦する体験です。

参加費：無料 定員：20名

○夢灯りづくり

日時：平成29年10月1日(日)

午後1時半から

内容等：星励忍さん(早池峰焼・星工房)を講師に迎え、「夢灯り」(光を楽しむ陶器の器)の模様作りを体験します。

参加費：2,500円から 定員：20名

○縄文あんぎん編み体験

日時：平成29年5月6日(土)

午後1時半から

内容等：「あんぎん台」という編み機を使って、縦・横の糸を交差させながらコースターを作る体験です。

参加費：200円 定員：10名

○鎧を着てみよう！

日時：平成29年10月8日(日)

午後1時半から

内容等：戦国時代の鎧(複製)を実際に着用する体験です。

参加費：無料 定員：10名



はじめに

多田等観は、1890（明治23）年7月1日、現在の秋田市土崎港中央にある浄土真宗本願寺派・弘誓山西船寺に14世義観の三男として生まれました。数奇な運命から、後にチベット学の国際的権威として、高く評価された人物です。

チベットに捧げた人生

1911（明治44）年2月に上洛し、西本願寺で得度入籍すると、宗祖である親鸞聖人650回大遠忌法要を手伝いました。



大谷光瑞 (龍谷大学大宮図書館所蔵)

その法要が終わると、門主である大谷光瑞のもとに呼ばれます。チベットのダライ・ラマ13世が派遣してきた3人の留学生の世話係に抜擢されました。まったく思いもよらないことでしたが、これが多田等観とチベットを結びつけ、一生をチベットに捧げることになるきっかけでした。

大谷光瑞といえば、海外での活動に積極的だったと知られ、20世紀初頭にかけて、西本願寺の若い僧侶たちを3次にわたって中央アジア等に派遣しました。これが「大谷探検隊」と呼ばれる学術探検隊です。仏教伝来の歴史的地理的解明と各地の仏教史跡の調査、並びに資料の収集を目的に派遣された探検隊は、多くの貴重な資料が収集されました。シル



砂漠を行く大谷探検隊 (龍谷大学大宮図書館所蔵)

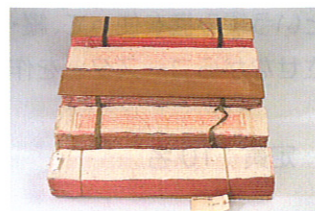


大谷探検隊の将来品の蓮華中仏坐像(左)菩薩頭部(右) (龍谷大学大宮図書館所蔵)

クロード研究をする上で、大きな業績を挙げたことは有名です。

1912（明治45）年、中国の辛亥革命の影響により、留学生が帰国することとなり、等観もインドへ渡ることになります。インドでは、ダライ・ラマ13世に謁見を許され、チベット名とチベット入国の許可を得ます。しかし、当時のイギリス・インド政庁による厳しい取り締まりのため、苦難の末、チベット入国を果たします。

チベット僧としての等観は、チベット大蔵経をはじめとした仏教関係の典籍の収集につとめました。当時のチベットは鎖国状態にあったので、帰国に際して請来



デルゲ版大蔵経の一部 (館蔵)

したチベット仏教関係の資料は、世界中の研究者も目にした事のない貴重なものばかりでした。

チベットで約10年に渡る修行を行い、外国人として唯一、チベット仏教の最高学位であるゲシェー（大僧正）の称号を与えられました。また、滞在中は、ダライ・ラマ13世の非公式な顧問として活躍しました。



チベット修業時代 (写真提供：多田明子氏)

帰国後の多田等観は、東北帝国大学、東京帝国大学等に籍を置き、講義をしながら、請来した資料の整理を行いました。その成果として1934（昭和9）年に東北帝国大学法文学部から『西藏大蔵経総目録』を、1953（昭和28）年には東北大学文学部から『西藏撰述仏典目録』を刊行しています。それが認められ1955（昭和30）年に日本学士院賞受賞、1967（昭和42）年には勲三等旭日中綬章を受賞しています。

この二つの刊行物は、世界のチベット仏教研究者のテキストとして大きな賞賛を持って受け入れられました。

多田等観の交流

このようなチベット学の国際的権威者と花巻とを結びつけたのは、第二次世界大戦でした。終戦が近づいた1945（昭和20）年、多田等観の自宅があった姉崎（現、千葉県市原市姉崎）は、空襲の被害が予想されていました。請来資料を戦禍から守るために、弟の鎌倉義蔵が住職を務めていた花巻の光徳寺に疎開させたのです。これらの資料を大切に守ってくれたのが、光徳寺の檀家の人々でした。

これが縁となり、多田等観は終戦後も花巻にたびたび足を運び、資料を保管してくれた家の人々との交流を行うように



一燈庵

なりました。1947（昭和22）年には、花巻西郊の円万寺観音山に多田等観が花巻に来た時に滞在するための「一燈庵」を地元の人々が造りました。

こうした人々の思いを受け止めた等観は「一燈庵」の隣にあり、古くから人々の信仰を集めていた円万寺観音堂の本尊として、千手千眼十一面観音像を本尊として納めました。

それから20年あまり、花巻の人々は等観に対する感謝と尊敬の思いを持ちながらも、「等観さん」と親しみを込めて呼びかけ交流を続けてきました。その人々の思いは今でも受け継がれています。



千手千眼十一面観音像 (円万寺観音堂蔵)

今回の展覧会は、没後50年という節目を向かえ、花巻市博物館が所蔵する「釈尊絵伝」など、多くの多田等観コレクションはもとより、花巻では公開されることが少なかった秋田県立博物館所蔵の等観ゆかりの資料や、花巻では初公開となる大谷探検隊の西域の将来品も併せて紹介いたします。博物館へ足をお運びいただき、チベット生活の様子や花巻の人々が等観に寄せた思いなどを感じ取っていただきたいと思います。(学芸員 小原 伸博)

● 記念講演会 ●

「大陸から花巻へ」— 多田等観をめぐる人々

講師：高本康子氏 (北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員)

日時：7月22日(土) 13:30～15:00

場所：花巻市博物館 講座体験室

活動レポート 「博物館と学校との継続的な連携」

花巻小学校5年生は「総合的な学習」で、花巻城跡について学習しています。当館では、児童が学習を深められるよう、学校と継続して連携しています。今回はその事例についてご紹介します。

※テーマ 「とび出そう！あとどころ」

1. 先生方・関係者との打ち合わせ

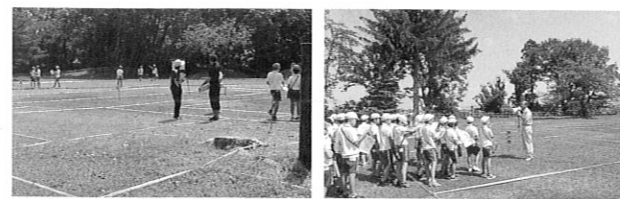
- ・平成 28 年 7 月 26 日
- ・博物館出席者 2 名
- ・内容 学習のねらいや学習の流れ等について打ち合わせました。

2. 第1回学習会の下準備

- ・平成 28 年 8 月 31 日
- ・博物館参加者 4 名
- ・内容 本丸御殿の間取り見学の準備。城跡にテープを張り当時の間取りを再現しました。

3. 第1回学習会

- ・平成 28 年 9 月 2 日
- ・博物館参加者 2 名
- ・内容
 - ①学校にて、花巻城についての概要説明
 - ②本丸跡での間取り等の説明
本丸跡での間取り説明では、テープで再現した間取りをもとに各部屋の役割について説



テープで間取りを再現 間取りの説明を聞く

明が行われました。児童は、お殿様気分を味わいつつ、間取りについて楽しく学ぶことができました。

4. 第2回学習会

- ・平成 28 年 9 月 27 日
- ・博物館出席者 2 名 (講師補助)
- ・内容
 - ①戦国末期の合戦や武器についての説明
 - ②甲冑着用体験、火縄銃・模造刀体験
持参した資料：甲冑1領、火縄銃2挺、模造刀2振。児童の興味関心が高まりました。



5. フィールドワーク打ち合わせ

- ・平成 28 年 9 月 30 日
- ・博物館出席者 2 名
- ・内容 フィールドワークのコース等について打ち合わせました。

6. 第3回学習会 (フィールドワーク)

- ・平成 28 年 10 月 7 日
- ・博物館参加者 3 名
- ・内容 城のつくりや城下町などのテーマに沿って現地で説明をしました。



7. 博物館見学の打ち合わせ・下見

- ・平成 28 年 12 月 13 日
- ・内容 花巻城にかかわる資料を見学し、まとめの学習を博物館で行いました。



枺形模型を見る 花巻城絵図を観察

このように、博物館では学校と連携し継続して学習機会の提供にも取り組んでいます。

(社会教育指導員 菊池恵津子)

コラム 梅鉢紋

今年の「花巻人形展～花鳥風月～」では、様々な花巻人形等が五百点程展示されている。花巻人形は、多種多様な人形がみられることで知られているが、内裏雛に次いで数多くみられるのが天神である。

天神は、菅原道真が神になったもので、冤罪で左遷され悲憤の死を迎えた道真が、怨霊として祟りをもたらしたことから、雷や天候を左右する農耕の神になったとされる。また、道真は、学者の家系に生まれ、33歳で文章博士になっており、文芸にも優れていたことから、学問の神、芸能の神としても信仰されるようになる。

花巻人形の天神には、右大臣の時の姿を模したものであろうか上置に坐し威厳を正した束帯姿の座天神、網の上に坐って紅梅を眺めたとされる網敷天神、道真と牛のエピソードを表す牛乗り天神等がある。

天神を示すシンボルが梅鉢紋である。梅鉢紋とは、中央に雌しべを表す小円と周りに花卉にあたる五つの大円で囲んだ形が基本形である。この他小円と外

円の間を剣型の雄しべを結び付けたもの等がある。梅鉢紋は、道真を祀った北野天満宮や太宰府天満宮を始め天神社の神紋となっている。

「東風吹かばにほひをこせよ 梅の花 主なしとて 春を忘るな」(拾遺和歌集)という句は有名であるが、道真は特に梅を好んだとされる。梅は、バラ科サクラ属の早春の花木であり、平安貴族に好まれたと言われる。

梅は、長江中流域の湖北省や四川省周辺が原産地とされ、遣唐使らによって様々な思想文物と共に日本にもたらされたとされる。つまり梅は、先端文化のシンボルとして貴族社会で珍重されたと考えられる。

平安時代前九年合戦後捕虜となった安倍宗任が、源義家と共に上洛した時、ある貴族が、蝦夷は花の名など知らないだろうと侮蔑して、梅の花の名を聞いたという。宗任は、「わが国の梅の花とは見つれども 大宮人はいかがいふらむ」(平家物語)と歌で返したとされる。なぜ梅の花であったのか気になっていた。しかし、梅が、当時先端文化を表す花木であつとすれば良く理解出来る。(館長 高橋信雄)

平成29年4月～平成29年7月の行事予定

企画展示室

●テーマ展「花巻人形展～花鳥風月～」
会期：5月7日(日)まで

●企画展「没後50年 多田等観展」
会期：7月1日(土)～8月20日(日)

記念講演会：
「大陸から花巻へ」—多田等観をめぐる人々
講師：高本康子氏
(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター共同研究員)
日時：7月22日(土) 13:30～15:00
場所：花巻市博物館 講座体験室
☆その他関連イベントを予定

講座・体験学習

- 【講座・体験学習】
- 5月3日(水) 勾玉づくり
- 5月4日(木) 琥珀玉づくり
- 5月5日(金) 縄文弓矢・火起こし
- 5月6日(土) あんぎん編み
- 7月9日(日) こけし絵付け
- 7月16日(日) 壁掛け傘づくり

※内容に変更がある場合があります。

時間は全て13時30分～

4月24日(月) 博物館開館記念無料公開日

詳しい内容は、花巻市博物館へお問い合わせください。

花巻市博物館

〒025-0014 岩手県花巻市高松26-8-1
電話：0198-32-1030 FAX：0198-32-1050
開館時間：午前8時30分から午後4時30分まで
休館日：12月29日から1月1日まで

入館料	小学生・中学生	150(100)円
	高校生・学生	250(200)円
	一般	350(300)円

※()内は20名以上の団体割引料金
※割安な近隣4館共通券もあります。
※特別展示を行う場合、入館料を別途定める場合があります。

http://www.city.hanamaki.iwate.jp/bunkasports/501/hanamakisihakubutukan/index.html

交通案内

- 東北新幹線 新花巻駅より 1km (車で約3分)
- 東北本線 花巻駅より 8km (車で約15分)
- 花巻空港より 6km (車で約10分)
- 釜石自動車道 花巻空港ICより 3km (車で約5分)
- 東北自動車道 花巻ICより 9km (車で約15分)
- 東北自動車道 花巻南ICより 9km (車で約15分)
- バス 東北本線花巻駅から磯山行き。停留所は「賢治記念館前」です。



ピックアップ

花博コレクション



古代東北地方北部の

せきさい
赤彩土器

上から時計回り (器高cm)
 古館Ⅱ遺跡出土 壺 (25.6cm)
 壺 (18.8cm)
 法領遺跡出土 碗 (7.0cm)
 熊堂古墳群出土 坏 (4.9cm)
 壺 (12.4cm)

写真の土器は、花巻市南部を奥羽山脈から東に流れる豊沢川流域に、奈良時代に営まれた古館Ⅱ遺跡、法領遺跡、熊堂古墳群から見つかった「赤彩土器」です。

赤彩土器は、古代（古墳時代～平安時代）の土師器という土器に赤色顔料で彩色が施されたものです。古墳時代、赤色顔料で彩色された土師器は各地で見られますが、奈良時代になるとその数は減少します。壺の口縁部に線描き文様が施される赤彩土器は、奈良時代に岩手県内陸部を中心に展開する特徴的な土器です。その分布は、岩手県内陸部の中でも、特に花巻市と北上市の遺跡に集中し、同心円状に東北地方北部に広がって分布しています。

古代の東北地方北部には、「蝦夷」と呼ばれる人々が暮らしていました。当地方の赤彩土器は、蝦夷が何らかの儀式の際に使用したものと考えられています。

東北地方北部の赤彩土器について、その器種や器形、赤彩文様、赤色顔料の色調等に着目し観察していくと、時期や地域によって違いがあることがわかってきました。

花巻で見つかった赤彩土器の中には、赤色顔料を厚く塗り重ねた後、ヘラ状工具で塗布面を丁寧に磨いたものがあります。光沢があり、きれいな仕上がりとなっています。これは、他の地域には見られない花巻の赤彩土器の特徴です。

今回ご紹介した赤彩土器は、常設展示室でご覧いただけます。

(学芸員 高橋静歩)